

42038

教科書文庫

4
815
41-1928
20000 89450.

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

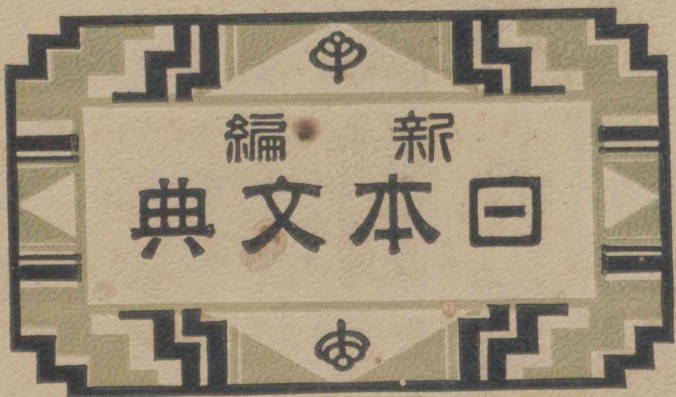
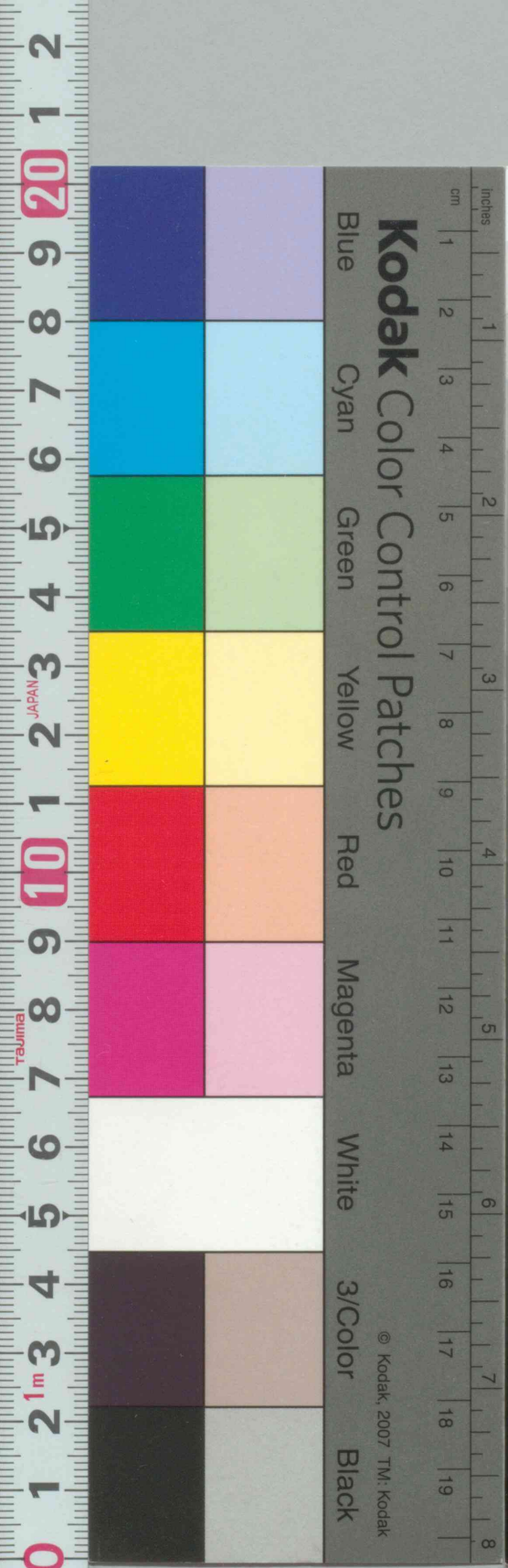


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



吉田彌平・小山左文 共著



東京 行發館風光 (Tokyo Kofunkan)



文部省檢定
昭和三年三月卅一日
中國國語教科用

教科書文庫

4

815

41-1928

2000089450

吉田彌平・小山左二
共著

新編
日本文典



広島大学図書

2000089450



東京
光風館藏版

教育学科
資料室

4a
810
AB3

緒言

- 一 本書は中等程度の諸學校に於ける國文法の教科書として編纂したものである。
- 一 本書は簡潔明快を旨とし、教授者の解説と相俟つて最も容易に國文法の大要を理解せしめ得るやう、特に心を用ひた。
- 一 本書は先づ品詞に關する一般の知識を授け、進んで文章に關する知識を與へる仕組にした。
- 一 最も平易な多くの實例によつて、その中に含まれてゐる國語・國文の法則を歸納的に知らしめるやうにとつとめた。

一 成るべく文語を本にして口語を對照し、文語法を習得すると共に、一通りの口語法に通ぜしめるやうにとつとめた。

一 本書は特に用例及び練習問題の選擇に意を用ひ、國定小學讀本、數種の中等諸學校用國語讀本、並に各高等專門學校入學試驗問題等の中から、最も實用に適切なものを採録した。

一 練習問題はこれを一括して卷末にかゝげ、生徒の程度、教授時間の多少等によつて、その取捨選擇を教授者の方寸に一任するやうにとつとめた。

昭和二年十月

新編 日本文典

目次

第一章	品詞	一
第二章	名詞の種類	四
第三章	代名詞の種類及び用法	六
第四章	動詞の活用及び形	九
第五章	口語動詞の活用及び形	一九
第六章	自動詞と他動詞	二四
第七章	動詞の音便	二七

第八章	動詞の語尾の假名遣	三〇
第九章	形容詞の活用形及び音便	三三
第十章	助動詞の種類及び活用	三六
第十一章	口語助動詞の種類及び活用	四五
第十二章	助動詞の形	五〇
第十三章	副詞の用法	五一
第十四章	助詞の種類及び用法	五三
第十五章	品詞の轉成	五八
第十六章	語の構成	六〇
第十七章	動詞と助動詞との接續	六五
第十八章	助動詞相互の接續	七九
第十九章	誤り易い助詞の用法	八〇

第二十章	誤り易い品詞の識別	九六
第二十一章	文の成分	一〇一
第二十二章	文の成分の排列と省略	一〇五
第二十三章	節	一〇九
第二十四章	文の構造上の分類	一一一
第二十五章	文の性質上の分類	一二五

附

練習問題

目次終

新編日本文典

第一章 品詞

單語はその性質によつて左の九種にわけらる。

1. 名詞 事物の名をあらはす語。

山 川 富士山 乃木希典 學問 戰爭

2. 代名詞 人又は事物をさす語。

われ 汝 彼 誰

こゝ そこ かしこ どこ

これ それ あれ どれ

名詞

代名詞

こち そち あち いづち

◎名詞と代名詞とを併せて體言といふ。

體言

3. 動詞 事物の動作をあらはす語。

讀む 書く 消ゆ 流る 有り 居り

動詞

4. 形容詞 事物の性質・状態をあらはす語。

白し 重し 厚し

美し 嬉し 正し

形容詞

◎動詞と形容詞とを併せて用言といふ。

用言

5. 助動詞 動詞に添うてその意味を助ける語。

書かず の ず

書きたり の たり

書くべし の べし

助動詞

副詞

6. 副詞 動詞・形容詞などの意味を限定する語。

書けり の り

必ず來れ の 必ず

頗るよし の 頗る

大に喜ぶ の 大に

甚だ貴し の 甚だ

接續詞

7. 接續詞 語句のつなぎに用ひる語。

山又山 の 又

梅の花及び櫻の花 の 及び

文を學び或は武を講ず の 或は

感動詞

8. 感動詞 物に感動した時に發する語。

あな嬉し の あな

助詞

やよ待て の やよ
 悲しいかな の かな
 ゆけや人々の や
 9. 助詞又てにをは 語句に添うて下の語句との關係をあらはす語。

名詞の種類

有形無形の事物

櫻の花 の の
 誰か知らん の か
 視れども見えず の ども
 よろしくば召上れ の ば

第二章 名詞の種類

一、有形無形の事物の名

地名人名

山 川 梅 鶯 机 硯 ビール マッチ
 春 秋 心 夢 命
 働 遊 忠 孝 競技 集會

二、地名人名

富士山 大井川 ロンドン
 伊藤博文 乃木希典 ワシントン

◎此の類の名詞を特に固有名詞といふ。

數詞

名詞の一種に數詞といふがある。これに左の種別がある。

- 一 數量をあらはす語
 - 一 二 三 四 五 六
 - 一 二 三 四 五 六
- 二 順序をあらはす語
 - 第一 二番 三つ目

第三章 代名詞の種類及び用法

人代名詞

自稱

對稱

一、人代名詞 人を指す代名詞。

1. 自稱 話す人自らを指すもの。

余 われ おのれ 私 僕

2. 對稱 相手を指すもの。

汝 君 あなた(口) おまへ(口)

◎自稱の おのれ われ は、時として對稱に用ひられる。

おのれにくき奴。(口)

われに負けてたまるものか。(口)

◎或名詞は、時として人代名詞に轉用される。

君 卿 名詞から人代名詞の對稱に。

他稱

不定稱

物代名詞

近稱

私 僕 名詞から人代名詞の自稱に。

3. 他稱 自分でも相手でもない外の人、即ち第三者を指すもの。

の。

あれ あの人

4. 不定稱 それと定めぬ人、又はわからぬ人を指すもの。

誰 どなた(口)

二、物代名詞 事物、場所又は方向を指す代名詞。

近くにある事物

同 地位

同 方向

1. 近稱

こ 此

これ

こゝ

こなた

こち

こなた こち

(口、こちら こつち)

そ それ

やゝ離れてゐる事物。

中稱

2. 中稱

そこ	同	地位。
そなた	同	方向。
そち		
そつち		

遠稱

3. 遠稱

かれ	離れてゐる事物。
かれ	同
あ	同
あれ	同
あそこ	同
かしこ	同
あなた	同
あなた	同
あち	同
(口、あちら)	同
あつち	同

不定稱

4. 不定稱

いづれ	それと定めぬ事物、
(口、どれ)	または分らぬ事物。
なに	同
いづこ	同
(口、どこ)	同
いづかた	同
いづち	同
(口、どちら)	同
どつち	同

動詞

動詞はその形がいろくにかはる。

第四章 動詞の活用及び形

降^フ

ら	り	る	れ
(あ段)	(い段)	(う段)	(え段)

◎こ^レそ^レは獨立しても用ひ、又、この^レその^レなどのやうに助詞の^レとつゞけても用ひる。

か^レあ^レは、か^レの^レあ^レの^レなどのやうに、おもに助詞の^レとつゞけて用ひる。

◎こ^レなた^レこ^レち^レは、自稱の人代名詞に、そ^レこ^レそ^レなた^レあ^レなた^レそ^レち^レは、對稱の人代名詞に、ど^レなた^レは、不定稱の人代名詞に轉用することがある。

語幹

語尾

活用

四段活用

「降」のやうに變らぬ部分を語幹といひ、らりるれ、のやうに變る部分を語尾といひ、その變ることを活用といふ。動詞の活用には左の種類がある。

一、四段活用

語尾が五十音圖中の あ い う え 四段に活用するもの。前例の 降る の類。

書く 押す 勝つ 思ふ 積む 釣る 漕ぐ 飛ぶ などは、皆この活用である。

◎四段に活用するのは、か さ た は ま ら が ば の 八行である。

◎此等の動詞は、その活用の行によつて、か行四段活用さ行四段活用などといふ。

動詞の形

動詞の各變化には、それ／＼用ひ方のきまりがある。これを動詞

の形といふ。

降

- ら (第一段) 雨降らず。
- り (第二段) 雨降りしきる。
- る (1) (第三段) 雨降る。
- る (2) (第四段) 雨降る日は鬱陶し。
- れ (1) (第五段) 雨降れば地固まる。
- れ (2) (第六段) 雨よ降れ。

降る は未然形。多くは事の未だ然らざることを假にいふ場合に用ひる。

降り は連用形。多く用言に連なる場合に用ひる。

降る (1) は終止形。多く文句の切れる場合に用ひる。

降る (2) は連體形。多く體言に連なる場合に用ひる。

降れ (1) は已然形。多く或る事件の既に成立したことをいふ

未然形
連用形
終止形
連體形
已然形

下二段活用と
その形

起か く く く れ る る る

う段

(終止)……早く起こく。
(連體)……遅く起こくること勿なれ。
(已然)……早く起こくれば、快こし。

◎生なく 朽くつ 用よふ 試しむ 報はゆ 懲ちる 過かぐ 恥ちづ 錆さぶ など
は皆この活用である。

◎上二段に活用するのは、か た は ま や ら が だ ば
の九行である。

五、下二段活用 五十音圖中、え う の二段に活用し、且そのう

段の音に る れ の添はるもの。

受う く け け

え段

(未然)……恩を受うければ、必ず報はいよ。
(連用)……恩を受うけたり。
(終止)……恩を受うく。

上一段活用と
その形

六、上一段活用 五十音圖中、い の一段にのみ活用し、且これに

見み み み み る る る る

い段

(未然)……花をみみず。
(連用)……花をみみいだせり。
(終止)……花をみみる。
(連體)……花をみみる人あり。

う段

(連體)……恩を受うくること久ひし。
(已然)……恩を受うくれば、必ず報はいよ。
◎得えは、その語全體が變化する。

◎得え 避よく 馳ちす 捨すつ 尋みぬ 教おふ 眺のむ 覺おゆ 流なる 植うう

◎得え 交まず 出でづ 述のぶ など皆この活用に屬する。

◎下二段活用の動詞は、五十音圖のすべての行にわたる。

口語上一段

仕事をす(文) 仕事をす(口)
 ◎文語さ行變格の未然形 せは、口語では せ 又は し となり、
 終止形 すは、する となる。

四、口語上一段活用

未然	連用	終止	連體	已然(文)	命令
見	み	みる	みる	みれ	みよ…文、上一
起	き	きる	きる	きれ	きよ…口、上一

早く起く(文) 早く起きる(口)
 早く起くる人(文) 早く起さる人(口)
 早く起くれ(文) 早く起され(口)

口語下一段

◎文語の上一段上二段の動詞は、口語ではすべて上一段活用となる。
 ◎文語上二段活用の終止形 起く、連體形 起くる は、口語では共に 起さる となり、已然形 起くれ は、假定形 起され となる。

五、口語下一段活用

未然	連用	終止	連體	已然(文)	命令
蹴	け	ける	ける	けれ	けよ…文、下一
受	け	ける	くる	くれ	けよ…文、下一

球を受く(文) 球を受ける(口)
 球を受くる人(文) 球を受ける人(口)
 球をうくれ(文) 球をうければ(口)

太郎 獨樂を廻す
 四郎 目的 風を揚ぐ

動詞活用形對照表

文		口	
活用	の語例	活用	の語例
か行四段	か	か行四段	か
が行四段	が	が行四段	が
さ行四段	さ	さ行四段	さ
た行四段	た	た行四段	た
は行四段	は	は行四段	は
ば行四段	ば	ば行四段	ば
ま行四段	ま	ま行四段	ま
ら行四段	ら	ら行四段	ら
な行變格	な	な行變格	な
か行變格	か	か行變格	か
さ行變格	さ	さ行變格	さ
か行上二段	か	か行上二段	か
が行上二段	が	が行上二段	が
さ行上二段	さ	さ行上二段	さ
た行上二段	た	た行上二段	た
は行上二段	は	は行上二段	は
ば行上二段	ば	ば行上二段	ば
ま行上二段	ま	ま行上二段	ま
や行上二段	や	や行上二段	や
わ行上二段	わ	わ行上二段	わ
あ行下二段	あ	あ行下二段	あ
え	え	え	え
え	え	え	え
う	う	う	う
うる	うる	うる	うる
うれ	うれ	うれ	うれ
えよ	えよ	えよ	えよ
未然	未然	未然	未然
連用	連用	連用	連用
終止	終止	終止	終止
連體	連體	連體	連體
已然	已然	已然	已然
命令	命令	命令	命令
語	語	語	語
尾	尾	尾	尾

語のもとが同じで、自他の活用のちがふ動詞

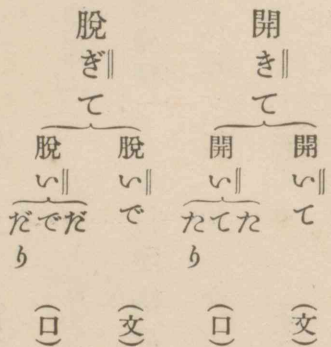
- 育つ(た四)……………子育つ。(自)
- 育つ(た下二)……………母子を育つ。(他)
- 足る(ら四)……………衣食足る。(自)
- 足す(さ四)……………仁君民の衣食を足す。(他)
- 見ゆ(や下二)……………月見ゆ。(自)
- 見る(ま上一)……………少年月を見る。(他)
- 冷ゆ(や下二)……………西瓜冷ゆ。(自)
- 冷す(さ四)……………下女、西瓜を冷す。(他)
- 盡く(か上二)……………糧食盡く。(自)
- 盡す(さ四)……………兵士糧食を食ひ盡す。(他)
- 落つ(た上二)……………木、葉落つ。(自)
- 落す(さ四)……………風、木の葉を落す。(他)

動詞の音便

い音便

第七章 動詞の音便

い音便 一行四段が行四段の連用形の きぎが いに轉ずるもの。



○ぎ が、い音便に轉ずるときは、次に來る たてたりはだ
 だり と濁る。
 ○開ひて「脱ぬで」などと書き誤つてはならぬ。

う音便

二、う音便

は行四段の連用形の ひ が う に 轉ずるもの。

逢ひて

逢うて (文)
逢うたり (口)

◎逢ふて などと書き誤つてはならぬ。

撥音便

三、撥音便

な行變格(口)な行四段及びば行ま行四段活用の連用形なる に び み が 撥音 ん に 轉ずるもの。

死にて

死んで (文)
死んだり (口)

呼びて

呼んで (文)
呼んだり (口)

促音便

四、促音便

ち ひ り が 促音に轉ずるもの。 た行は行ら行の各四段及びら行變格の連用形なる

讀みて

讀んで (文)
讀んだり (口)

◎撥音便の下に来る た て たり は何れも だ で だりと濁る。

打ちて

打つて (文)
打つたり (口)

従ひて

従つて (文)
従つたり (口)

動詞の語尾の
假名遣

有 ^り 取 ^り て	有 ^つ 取 ^つ て
有 ^つ 取 ^つ たり	(文)
(口)	

○は行四段の連用形は「買^うて」「買^つて」のやうに、う音便にもなり、又、促音便にもなる。

第八章 動詞の語尾の假名遣

或動詞の語尾は、發音が同じやうに聞えるため、互に紛れ易い。

思^ひて 抜^いて 聞^いて 率^ゐて
 思^ふ 思^うて
 誣^ふ 老^ゆ 餓^う
 答^へず 見^えず 植^ゑず

動詞の語尾の假名遣を正しく知る諸法。

一、動詞の活用を明かにすること。

出^づ 交^ず
 例へば、堪^がは^行の^下二^段、絶^がや^行の^下二^段に活用することを知つたならば、すぐに 堪^え 堪^ゆ は 堪^へ 堪^ふの誤であること、絶^へ 絶^ゆ は 絶^え 絶^ゆの誤であることを知る類である。

二、少い方の活用並に假名遣を記憶して、他の多い方を推定すること。

例へば、交^ず が^ぎ行^の下^二段^活用の唯一の動詞であることを記憶すれば、その他の 出^づ 詣^づ 撫^づ 秀^づなどは、何れも皆だ行^の下^二段^活用であることが推定される類である。

三、本来の活用と音便との別を明かにすること。
 例へば、問ひての問ひは本来的は行四段活用で、説いての説いはか行四段説きのい音便であることを知つたならば、問ひてと説いてとの假名遣を誤ることのない類である。

四、親類の語より推定すること。

例へば、はやすといふ他動詞から自動詞はゆのや行であることを知り、いだすといふ他動詞から自動詞いづのだ行であることを知る類である。

第九章 形容詞の活用形及び音便

形容詞の活用

形容詞も亦動詞のやうに語の下部が變化する。

高たか
 けれ さい し くれ

同おな正ただ
 じし くれ さい

語幹
 語尾
 活用
 第一類
 第二類

たか ただし おなじ のやうに變化しない部分を語幹といひ、くれ し き けれ 又は くれ き けれ のやうに變化する部分を語尾といひ、その變化することを活用といふ。随つて、形容詞の活用には、二種あることがわかる。甲を第一類の形容詞といひ、乙を第二類の形容詞といふ。

◎第二類の形容詞は、語幹の最後の音が し 又は じ である。この し 又は じ は語幹の一部であるが、習慣上、送假名として書きあらはす例になつてゐる。

これらの形容詞の各變化に、それ／＼用ひ方のきまりがあることは、動詞の各變化に似てゐる。

未然形

一、未然形

山高くば、眺望よからん。
心正しくば、人に敬せられん。

連用形

二、連用形

山高く聳ゆ。
心を正しく持つ。

終止形

三、終止形

山高し。
心正し。

連體形

四、連體形

高き山を越ゆ。
心正しき人を敬す。

已然形

五、已然形

山高ければ、眺望よし。
心正しければ、人に敬せらる。

語幹	高	未然	語	尾
	正し	連用		
高	く	連用	し	連體
正し	く	終止	○	已然
	き	連體	き	
	けれ	已然	けれ	

○形容詞には命令形はない。
○第二類形容詞の終止形には語尾がない。語幹そのまま、が終止形になる。

口語では、終止連體の二形が同じ形になる。随つて第一類第二類の區別は全くない。

山が^{終止}高い。
山が^{連體}高い山。
心が^{終止}正しい。
心^{連體}正しい心。

形容詞と動詞
ありとの結合

形容詞の連用形は動詞

ありと結びついて、ら行變格となる。

◎第五段は、動詞と同じやうに假定となる。

正し	高	語幹	語
く	く	未然	
く	く	連用	尾
い	い	終止	
い	い	連體	
けれ	けれ	假定	

高く)か 高く)か 高く)か 高く)か
 あら あり ある あれ
 正しく)か 正しく)か 正しく)か 正しく)か
 あら あり ある あれ

形容詞と動詞
すとの結合

形容詞の連用形は、又動詞

すと結びついて、さ行變格となる。

う音便

このくは、又う音便でうに轉ずることがある。

高く)か 正しく)か
 せよすれするすしせ
 せよすれするすしせ
 せよすれするすしせ
 せよすれするすしせ

い音便
形容詞連體形の語尾 き は、又い音便で い に轉ずることがある。

悲しきかな。…悲しいかな。

第十章 助動詞の種類及び活用

時の助動詞

一、時の助動詞

過去 けり

過去……

昨日大雪降りき。ししか
昨日大雪降りけり。ける けれ

未來 む

未來……明日、雪降らむ。め

○む は、今では ん と發音し、從つて、通例 ん と書く。

完了

りたりぬつ

完了……

雨止み ぬ
雨止み たり たら たり たる たれ
雨止み づ ぬ ね
雨止み じ じり ざり ざる ざれ

存続的現在

○たり は「花咲きたり」のやうに用ひて、動作の結果の存在する意をあらはすことがある。之を存続的現在といふ。

進行的現在

○り は「雪降り」のやうに用ひて、動作の行はれつゝあることをあらはすことがある。之を進行的現在といふ。

恆の時

○水は低きに就く。「雨降つて地固まる」のやうに、現在の形を用ひて眞理習慣等をあらはすことがある。これを恆の時といふ。

打消の助動詞

二、打消の助動詞

ず

ず ぬ ね

ざり

花見に行かざり ざり ざる ざれ

じ

じ (活用せぬ)

まじ

花見に行く まじ ざり ざる ざれ
まじく まじ まじき まじけれ

推量の助動詞

三、推量の助動詞

◎じ まじ は推量して否定する意味である。

らむ

(らむ らめ)

らし

(活用せぬ)

べし

(べく べし べき べけれ)

べかり

(べから べかり べかる べかれ)

めり

(めり める めれ)

む

(む め)

まし

(まし ましか)

けむ

(けむ けめ)

◎けむ は過去の事実を推量する意味である。

◎今では、らむ は らん、む は ん、けむ は けん と發音

受身の助動詞

四、受身の助動詞

し、随つて、通例 らん けん と書く。

る

太郎、犬に噛まる (れる る、 れれ れよ)

らる

次郎、馬に蹴らる (られ らる、 らるれ られよ)

可能の助動詞

五、可能の助動詞

一時間に三里は走らる (れる る、 るれ)

此の間には我も答へらる (られ らる、 らるれ)

千引の岩もくたくべし (べく べし べき べけれ)

美しさ名状すべからず (べから べかり べかる べかれ)

◎可能の る らる の活用は、受身の らる と同じで、べし

べかり の活用は、推量の べし べかり と同じである。

べし は推量可能の外、左の意味にも用ひられる。

自發の助動詞
使役の助動詞

す
さす
しむ

六、使役の助動詞

子は親に孝なるべし。(當然)
明日出頭すべし。(命令)
今後は斷じて再びせざるべし。(決意)
らるは動作が自ら起つて止め難き意に用ひられることがある。
子の行末思はる。
母上の事のみ案ぜらる。
かやうな場合には、之を自發の助動詞といふ。

左官に壁を塗ら
す (せ) す (する) すれ (せよ)
しむ (しめ) しむ (しむる) しむれ (しめよ)
大工に家を建てしむ (同上)

尊敬の助動詞

る
らる
す
さす
しむ

七、尊敬の助動詞

〔さす (させ) さす さする さすれ させよ〕

兄上は親類のうちに出かる。
主人は今朝旅行先より歸宅せらる。
澄宮殿下には、學習院に御通學あらせらる。
皇后陛下には赤十字總會に行啓せさせたまふ。
天皇陛下には大觀艦式に臨ましめたまふ。

○る らる の活用は、受身可能の る らる と同じで、せ させ しめ の活用は、使役の せ させ しめ と同じである。
◎尊敬の せ させ しめ は、通例尊敬の助動詞 らる 又は尊敬の動詞 たまふ の上に結びつけて用ひる。

八、指定の助動詞

人は萬物の靈長なり。(なら なり なる なれ)

指定の助動詞
なり

たり

我は我たり。

(た)ら (た)り (た)る (た)れ

◎指定の たり の活用は完了の たり と同じである。しかし、その意味は全くちがふ。

◎指定の助動詞は名詞代名詞につくのが常であるが、時としては用言の連體形の下につくことがある。これは、その間に體言が略されてゐるのである。

運動もするなり。

それがよきなり。

詠歎の助動詞

九、詠歎の助動詞

なり

秋の野に人まつ蟲の聲すなり。(なり) なる (な)れ

けり

あやしきものは心なりけり。(けり) ける (け)れ

◎指定の なり は名詞代名詞又は動詞形容詞の連體形から受け、詠歎の なり は動詞の終止形から受ける。

希望の助動詞

一〇、希望の助動詞

たし

花見に行きたし。(た)く (た)し (た)き (た)けれ

まほし

健康にてあらまほし。(ま)ほしく (ま)ほし (ま)ほしき (ま)ほしけれ

比説の助動詞

一一、比説の助動詞

ごとし

歲月は流るゝごとし。(ご)とく (ご)とし (ご)とき

ごとし は助詞 の が つくのが本體である。

風景畫圖のごとし。

有れども無きがごとし。

第十一章 口語助動詞の種類及び活用

一、時の助動詞

口語時の助動詞

た (過去) (完了)

過去 昨日雪が降つた。(た)ら (た)り (た)た (た)れ

引 (未來)
よう (未來)

完了 今しがた風が静まつた。(同上)
やがて雨が止まう。(活用せぬ)
未來 もうぢきに空が霽れよう。(同上)
この たが、「死んだ」「飛んだ」のやうに だと濁ることについては、前の動詞の音便の章を見よ。

二、打消の助動詞

口語打消の助動詞
ぬ

風は吹かない。(ずぬぬ)
なかつた。(なからなかつ)

風は吹くまい。(活用せぬ)

○ぬ は通例 ん と發音し、隨つて ん とも書く。

○まい は推量して打消す助動詞である。

口語推量の助動詞

う

よう

らしい

口語受身の助動詞

れる

られる

口語可能の助動詞

れる

られる

三、推量の助動詞

明日は多分雪が降らう。(活用せぬ)

今頃は定めしこちらの話をして居よう。(活用せぬ)

此の模様では雪が降るらしい。(らしい)

四、受身の助動詞

猫が犬に追はれる。(れるれれれよ)

太郎は馬に蹴られる。(られるられられよ)

五、可能の助動詞

一日に十里は歩かれる。

君の球は私にも受けられる。

○可能の れる れ は、四段活用の動詞と結びついて、次の例のやうに約まることがある。

章	役使	能可	身受	量	推	消打	時			種類														
							來未	了完	去過															
る	しむ	さす	べかり	べし	る	る	けむ	まし	む	めり	べかり	べし	らし	らむ	まじ	ざり	ず	む	りたり	ぬつ	けり	き	本形	
れ	しめ	させ	べから	べく	られ	られ					べく	べく			まじ	ざら	ず		ら△た	なて	け△ら		未然	
れ	しめ	させ	べかり	べく	られ	られ					めり	べかり	べく		まじ	ざり	ず		り△た	にて	け△り		連用	
る	しむ	さす	べし	る	る	る	けむ	まし	む	めり	べし	らし	らむ	まじ	ざ	ず	む	り	たり	ぬつ	けり	き	終止	
る	しむ	さす	べかり	べき	る	る	けむ	まし	む	めり	べかり	べき	らし	らむ	まじ	ざ	ぬ	む	る	たる	ぬる	つる	ける	連體
る	しむ	さす	べかり	べけれ	る	る	けむ	まし	め	めれ	べけれ	べけれ	らし	らめ	まじ	ざ	ね	め	れ△た	ぬれ	つれ	けれ	しか	已然
れ	しめ	させ			られ	られ									まじ	ざ			た△ね	てよ			命令	
れる	させる	せる	られる	れる	られる	られる	よう	う	う	う	らしい	らしい	らしい	ま	な	ぬ	よう	う	た	た	た	た	本形	
れ	させ	せ	られ	れ	られ	られ					らし	らしく	らしく	な	な	ず			た	た	た	た	未然	
れ	させ	せ	られ	れ	られ	られ					らし	らしく	らしく	な	な	ず			た	た	た	た	連用	
れる	させる	せる	られる	れる	られる	られる	よう	う	う	う	らしい	らしい	らしい	ま	な	ぬ	よう	う	た	た	た	た	終止	
れる	させる	せる	られる	れる	られる	られる	よう	う	う	う	らしい	らしい	らしい	ま	な	ぬ	よう	う	た	た	た	た	連體	
れ	させ	せ	られ	れ	られ	られ									な	ね			た	た	た	た	假定	
れ	させ	せ			られ	られ																	命令	

助動詞活用形對照表

△は古文のみに用ひる。
□は係結の時にのみ用ひる。

終止形

終止形 マツチを見に行きたし。

連體形

已然形
(口、假定形)

命令形

副詞の用法

自由に遊ばせる。(口)

雨の霽れぬるこそ嬉しけれ。

連體形

マツチ見に行きたき心は、余も友も同じ。

自由に遊ばせる時もある。(口)

雨霽れぬれば、見に行きぬ。

已然形
(口、假定形)

マツチ見に行きたければ、出でゆきたり。

自由に遊ばせれば、喜ぶだらう。(口)

命令形 自由に遊ばせよ。

◎形容詞に似た活用をする助動詞には、命令形はない。

第十三章 副詞の用法

副詞は動詞・形容詞の意味を限定する外、他の副詞の意味を限定す

る。

いと 副 静かに 副 物語る。

たいそう 副 早く 副 駆ける。(口)

副詞は又語を隔て、動詞・形容詞等の意味を限定する。

頗る 副 山水の景に富めり。

少しも 動 怒り恨んでゐる様子がない。(口)

副詞は又動詞・形容詞或は副詞の用をなす句の意味を限定する。

◎句とは二つ以上の語の連つて一つの意味をなすものである。

決して 副 人を欺くべからず。

たつた 副 半日の道です。

纔かに 副 十秒の差にて敗れたり。

助詞の種類及び用法
助詞に添はる

第十四章 助詞の種類及び用法

一、體言に添はる助詞。

の 兄の帽子。(所有の關係を示す)

の 米のなる木。(動作・状態の主を示す)

が 我が庭。(所有の關係を示す)

を 花を觀る。(動作の目的を示す)

に 山に登る。(場所を示す)

へ 前へ進め。(方向を示す)

と 山と川と。(事物の並列を示す)

と 友人と遊ぶ。(共同の意を示す)

より 歐洲より歸る。(起點を示す)

より 花より團子。(比較の標準を示す)

まで 神戸まで出迎ふ。(到着點を示す)

種々の語に添はる助詞

にて ペンにて書く。(方便を示す)
口語では、起點を示す文語の より は から となり、方便を示すにて は で となる。並列を示す と は、意味の紛れない場合には最後の一を略してもよろしい。

から 歐洲から歸る。
で ペンで書く。
と 山と川。

二、種々の語に添はる助詞。

は 墨は黒し。(特に或物をきりはなしていふ意を示す)
ば 行をば慎む。(同上)
も 學も徳も高し。(事物の一致を示す)
ぞ 月をぞ愛づる。(特に上の語を指す意を示す)
なむ

◎なむ は なん と發音し、從つて なん とも書く。
こそ 月をこそ愛づれ。(強く上の語を指す意を示す)
し 必ずしも然らず。(同上)
や ありやなしや。(疑ひ又は問ふ意を示す)
か あるかなきか。(同上)
だに 風邪一つだにひかず。(重きを措いて輕きを言外に含ませる意を示す)
すら 禽獸すら恩を知る。(同上)
さへ 暴風さへ加はる。(あるが上になほ物の添ひ加はる意を示す)
のみ 粥のみ すゝる。(それと限る意を示す)
ばかり 泣くな、笑ふな。(禁止の意を示す)
な 泣きな、笑ひな。(同上)
な…そ 文語の や は、口語では か となり、だに は ても とな

り、すらはさへとなり、さへはまでとなり、な
そはなとなり、のみはばかりとなる。

か あるかないか。

でも 風一つでもひかない。

さへ 禽獸でさへ恩を知つてゐる。

まで 暴風までが加はる。

ばかり 粥ばかりすする。

な 泣くな笑ふな。

◎は ばも か 等は、口語と文語と同じである。ぞ なむ し
は、これに相當する口語がない。但し、こそ は「それでこそ男だ。」
の如く、稀に口語にも用ひられる。

動詞・形容詞・
助動詞に添は
る助詞

三、動詞・形容詞・助動詞に添はる助詞。

ば 乞はゞ與へん。(假定の條件で、順當な接續の意を示す)
乞へば與ふ。(確定の條件で、順當な接續の意を示す)

ど 乞へど 與へず。(確定の條件で、不順當な接續の意を示す)
ども 乞ふども 與へじ。(假定の條件で、不順當な接續の意を示す)

に 梅は咲けるに、鶯は未だ來鳴かず。(反對になる意を示す)
を 雪は降りしが、風は吹かざりき。(同上)

つ、 歩みながら 語る。(動作の同時に起ることを示す)
ながら

で 何事をもなさで、日を暮す。(打消の意を示す)

確定の ば は、口語では ので から となり、假定の とも
は ても となり、を は に となり、つゝ は ながら
となり、で は ないで 又は ずに となる。

乞ふ ので から 與へる。

乞うても與へまい。
梅は咲いてゐるのに鶯はまだ來て鳴かぬ。
あるきながら語る。

何事も しない で
せずに 日を暮す。

その他は、大概文語と口語と同じである。

第十五章 品詞の轉成

轉來の名詞

一、轉來の名詞

螢の光。 水の刃。 (動詞の連用形から)

白のシャツ。 黒の帽子。 (形容詞の語幹から)

遠くの親類。 近くの他人。 (形容詞の連用形から)

◎動詞は、通例この連用形から名詞に轉じる。

轉來の代名詞

二、轉來の代名詞

僕は今君の宅へ行くところなんだ。(口)(名詞から)

◎御身 御前 わらは なども亦此の例である。

轉來の副詞

三、轉來の副詞

終日食はず、終夜寝ねず。(名詞から)

つまり僕の失策だ。(口)(動詞の連用形から)

早く起き、遅く寝ぬ。(形容詞の連用形から)

◎形容詞は、通例その連用形から副詞に轉じる。

轉來の接續詞

四、轉來の接續詞

本日缺席仕候間、御届申上候。(名詞から)

暑さ厳しく候處、御障無之候や。(同上)

松島・天の橋立及び嚴島を日本三景といふ。(動詞の連用形から)

第十六章 語の構成

疊語

一、**疊語** 同じ語の重なつて一語となつたもの。

(イ) 疊語の名詞 山々 國々 人々

(ロ) 疊語の代名詞 われく たれく

(ハ) 疊語の形容詞 長々し 軽々し さかくし なれく

し 美々し 神々し

(ニ) 疊語の副詞 時々 日々 それく 追ひく 見す見

す とくく 唯々 尙々

(ホ) 疊語の感動詞 いざく あはれく (文) おやく

さあく (口)

熟語

二、**熟語**

二個以上の單語が相合して一語を作つたもの。

一、熟語の名詞

朝日 櫻狩 夜寒 請取 織物 賣高 遠淺 嬉し涙

苦笑

◎熟語の名詞には、山櫻花 蚊遣火 食はず嫌ひ したり顔 往復
はがき 書留手數料 などのやうに、三語以上の結合から成るものもある。

二、熟語の動詞

物語る 引つ繰り返す 近づく

三、熟語の形容詞

名高し 見にくし 細長し

四、熟語の副詞

素より 恐らくは すこしも さぞ

◎ほしいまゝに やゝもすれば などのやうに、多くの語から成り立つてゐる熟語の副詞もある。

三、熟語の接續詞

然らば 随つて 就中 しかのみならず

◎ 熟語が相合して熟語となるときは、次の語の頭の音を濁ることがある。その濁ることを連濁といふ。

はな[○]その…はな[○]ぞの (花園)
いし[○]はし…いし[○]ばし (石橋)
もの[○]か[○]たる…もの[○]が[○]たる (物語る)
うす[○]く[○]らし…うす[○]ぐ[○]らし (薄暗し)

四、接頭語 或語の頭につく獨立しない語をいふ。

い[○]や…い[○]や 増す
う[○]ひ…う[○]ひ 産
い[○]ち…い[○]ち 早し
う[○]ひ…う[○]ひ 産

連濁

接頭語

接尾語

え[○]せ…え[○]せもの

あ[○]ん…あ[○]ん志

さ[○]…さ[○]き絲

御…御奮發

す…す足

ひ[○]が…ひ[○]が目

ほ[○]の…ほ[○]の見ゆ

み…み雪

あ…あ宮

か…か弱し

け…けうとし

さ…さ迷ふ

た…たやすし

不…不出來

ま…ま菰

を…を暗し

五、接尾語 或語の下につく獨立しない語をいふ。

(イ) 體言の下について複数をあらはすもの。

ども…私ども
ら…我ら

がた…あなたがた
たち…男たち

ばら…殿ばら

(ロ) 體言の下について敬意をあらはすもの。

ひま 神ひま

どの 太郎どの

君 山田君

(ハ) 形容詞の語幹について名詞を作るもの。

さ 長さ 寂しさ み 深み 楽しみ

げ 重げ 悲しげ

(三) 名詞・形容詞の語幹等について動詞を作るもの。

めく 時めく(か四) なふ 伴なふ(は四)

ばむ 黄ばむ(ま四) がる 悲しがる(ら四)

まる 高まる(ら四) ぶ 大人ぶ(ば上二)

ちぶ 神ちぶ(ば上二)

(ホ) 名詞等について形容詞を作るもの。

けし 露けし らし 男らし

がまし こそがまし

(ヘ) 名詞・動詞・形容詞等について副詞を作るもの。

がてら 月見がてら

すがら 道すがら

づつ 少しづつ

まに 思ふまに

◎まに 略して まに ともいふ。

第十七章 動詞と助動詞との接續

一、動詞の未然形につゞく助動詞

(イ) 未然形につゞく。 はすべての動詞の

未然形につゞく。

四段 誘はむ

ら 變 有らむ

な 變 死なむ

か 變 來む

さ 變 爲む

花見に友人を誘はむ。

友人と花を上野に見む。

老いず死なむの薬もがな。

彼は終に訪ひ來むざりき。

不義の振舞をばせむ。

動詞の未然形につゞく助動詞

上二…起き
 下二…捨て
 上…見
 下…蹴

〔明日も恐らくは降雨あらじ。〕
 明朝は五時に起きまし。
 下女に塵を捨てしむ。
 早く見まほし。

○あ行下二段の動詞 得の未然形 得に しむ を添へて 得しむ といふべきを 得せしむ といふことは中古文の法則ではないが、今は許容されてゐる。

○上一段活用の未然形 着 見 等に しむ を添へて、着しむ 見しむ といふべきを 着せしむ 見せしむ などといふのは何れも誤である。

○下二段活用の未然形 着せ 見せ に しむ を添へて、着せしむ 見せしむ といふのは、前のはわけがちがふから勿論正しい。母、お花に人形の着物を着せしむ。太郎、次郎をして三郎に本を見せしむ。

(ロ) する は四段ら行變格な行變格の未然形につゞき、らる さす はこの外の動詞の未然形につゞき、り はさ行變格に限つてその未然形につゞく。

四…誘はる
 ら變…居らる
 な變…死なす
 か變…來る
 さ變…爲らる
 上二…起き
 下二…捨て
 上…見
 下…蹴

花見に誘はる。
 父上は宅に居らる。
 潔く死なす。
 先生宅に來らる。
 大いに満足せらる。
 馬丁馬に蹴らる。
 毎朝五時に子供を起きさす。
 下女に塵を捨てさす。
 弟に郵便受の中を見さす。
 大いに満足せり。

動詞の連用形
につゞく助動
詞

つて次のやうになる。

しられる^さ しさせる^さ

二、動詞の連用形につゞく助動詞

(イ) けり

たり(完了) けむ たし は總べての動詞の連用形

につゞき、ぬ(完了) はな行變格以外の動詞の連用形につゞき、

きは、か行變格以外の動詞の連用形につゞく。

上二	起き	たり	公園に散歩したり。
さ變	爲	つ	友人遊びに来つ。
か變	來	けり	早朝に起きけり。
ら變	有り	き	戦ひて死にき。
四	咲き	ぬ	塵を捨てぬ。
な變	死に	ぬ	花咲きぬ。

(ロ) き は、か行さ行の兩變格につゞく時には、次のやうな例外がある。

○完了のぬ は、な行變格にはつゞかぬ。

下二	捨て	けむ	いづこに捨てけむ。
上二	見	たし	博覽會を見たし。
下二	蹴	たし	ボールを蹴たし。

か變「來」

未然	こ	し	こし方行末。
連用	き	しか	こしかど行かざりき。

さ變「爲」

未然	せ	し	遠足せし事あり。
連用	し	しか	遠足せしかど疲れざりき。

◎さ行變格では、「せし事」「禁ぜしかば」のやうに、未然形に「し」を續ける。「しゝ事」「禁じしかば」のやうに、連用形につゞけてはならぬ。

◎四段活用は、さ行でもやはり「爲しゝ事」「盡しゝ人」と連用形につづけるのが中古文の法則である。しかし、今は、「爲せし事」「盡せし人」のやうにいふことも許容されてゐる。

(ハ) 口語の「た(完了去)ます たい は、すべての動詞の連用形につづく。

上	一	見	起	さ	變	爲	か	變	來	四	有	死	咲
下	一	蹴	起	變	爲	來	變	來	死	有	死	咲	咲
上	一	見	起	變	爲	來	變	來	死	有	死	咲	咲
下	一	蹴	起	變	爲	來	變	來	死	有	死	咲	咲

た(だ) 花が咲いた。
友人が来た。
友人が死んだ。
机があります。
五時に起きます。
ボールを蹴ります。

動詞の終止形につゞく助動詞

下 一 捨て 捨て
一 蹴 蹴
一 たい 勉強をした。
一 たい 相撲が見たい。
一 たい 塵を捨てたい。

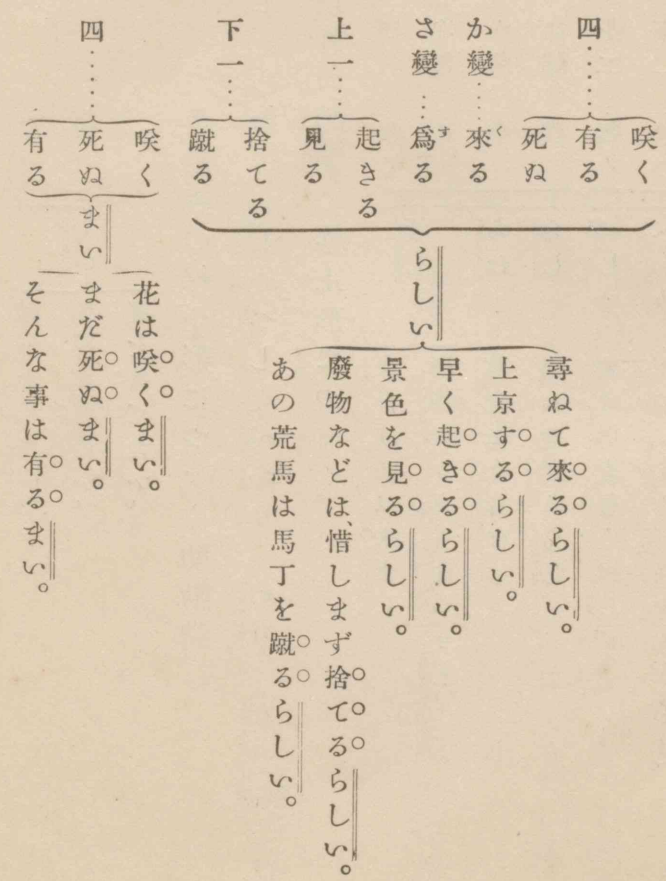
三、動詞の終止形につゞく助動詞

(イ) まじ らむ らし べし べかり めり なり (詠) はら行變

格以外の動詞の終止形につゞく。

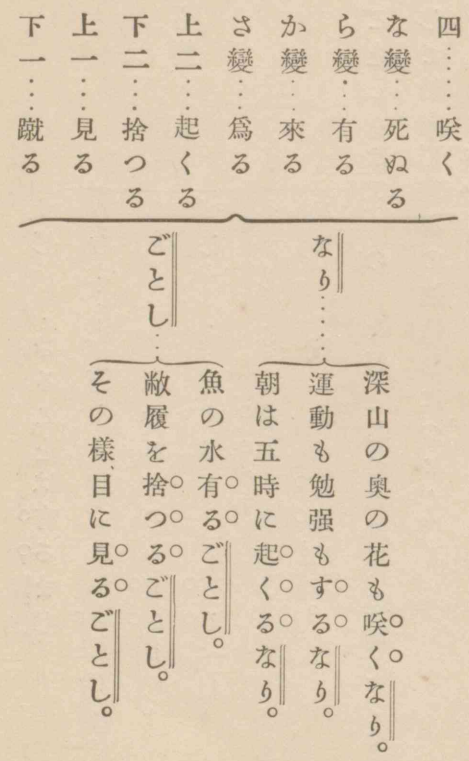
四 …… 咲く 今日(けふ)は訪(ま)ひ來(こ)まじ。
な變 死ぬ 廢物(くず)たりとも捨(す)つまじ。
か變 來 花(はな)や咲(さ)くらむ。
さ變 爲 馬(うま)人(ひと)を蹴(こ)るらし。
上二 起く 朝(あ)は早(はや)く起(お)くべし。
下二 捨つ べかり 命(いのち)をな(な)がらふ。
上一 見る めり 彼(か)は此(こ)方(かた)を看(み)るめり。
下一 蹴る なり (詠) 秋(あき)の野(の)に人(ひと)まつ蟲(むし)の聲(こゑ)すなり。

(ロ) 口語のらしいは總べての動詞の終止形につゞき、まいは四段活用の動詞の終止形につゞく。



動詞の連體形につゞく助動詞

◎まいは四段以外の動詞には、その未然形につゞく。
四、動詞の連體形につゞく助動詞
(一) なり(指定) ごとしは總べての動詞の連體形につゞき、まじらむらしべしべかりめりは、ら行變格の動詞に限つてその連體形につゞく。



ら變…有る

まじ……さることは有るまじ。
 らむ……如何なる理由にか有るらむ。
 らし……焼死せるものも有るらし。
 べし……缺席するものも有るべし。
 べかり……さも有るべかりき。
 めり……寂しくも有るめり。

◎ごとし

は又、の を媒として名詞代名詞につき、が を媒と

して動詞形容詞の連體形につづく。

月光銀のごとし。
 落花蝶の舞ふのごとし。
 環の端なさがごとし。

良買は深く藏して虚しさがごとし。

◎詠歎の

なり は動詞の終止形につゞき指定の なり はその連體形につづく。

(二) 口語の だ です は助詞 の を媒として總べての動詞の連體形につづく。

四變	有る	咲く
か變	來る	
さ變	爲る	
上	起さる	
見	見る	
捨	捨てる	
蹴	蹴る	

(の) だ。
 (の) です。

明日は試験が有るの[△]だ。
 正直だから店が繁昌するの[△]です。
 忙しいから朝早く起きるの[△]だ。
 忙しいから朝早く起きるの[△]です。

◎だらう でせう などにつづく時は、の を省くことがある。

五、動詞の已然形につづく助動詞

動詞の已然形につゞく助動詞

りは四段活用の動詞に限つてその已然形につゞく。

四……咲けり……白菊今を盛と咲けり。

◎りがさ行變格の動詞の未然形につゞくことは前に述べたとほりである。

◎りをな行變格 死ぬ の命令形 死ぬ につゞけて 死ねり

とすること及びら行變格 居り 異なり の已然形 居れ 異な

れ につゞけて 居れり 異なれり とすることは中古文の法則

ではないが今は許容されてゐる。但し、同じな行變格ら行變格でも

往ねり 侍れり などといふことは許容されぬ。又 流れり 蹴

れり などのやうに、下二段下一段の活用などにつゞけることは、一切許容されぬ。

助動詞相互のつゞき方

第十八章 助動詞相互の接續

助動詞は必要に應じ、數個相連なつて動詞の意を補ふことがある。

吉野山の花も、咲きたるなるべし。

東京は、きのふ夕立が降らなかつたらしい。

のたるなるべし及びなかつたらしいの如きはその一例である。

此等各助動詞をつゞける方法は、大凡動詞と助動詞とをつゞける

方法と同じであるから、茲にはこれを略し、たゞ時の助動詞を重ね

て用ひる場合に生じる特殊の意味についてのみ左にこれを説明

しよう。

花咲き なて む たら

てむ は完了の希望を示す意となる。それゆゑ、疾く讀みてむ。といへば、早く讀んでしまひたい。といふ意となる。

第十九章 誤り易い助詞の用法

一、**ば**の用法 **ば**には**假定のば**と**確定のば**とがある。「**假定のば**」は動詞・形容詞・助動詞の未然形に添ひ、**確定のば**はその已然形に添ふ。而して此等は何れもその條件の下に起る事實の順當なことをあらはす。

假定のば
確定のば

假定のば

風吹かば波立たむ。

天氣よくば散歩せむ。

確定のば

風吹けば波立つ。

天氣よければ散歩す。

散歩す。

知らずば往きて問へ。 知らざれば行きて問ふ。

○假定の條件に應ずる述語は通例假定であるが、まゝ確定の述語を用ひることもある。

明日が日曜日ならば、明後日は月曜日なり。

○命令の語は、假定の述語と見做す。

○確定の條件に應ずる述語は、假定・確定の何れをも用ひる。

口語では動詞・形容詞・助動詞の假定形に **ば** を添へて假定の條件を示し、**ば** の代りに **ので** 又は **から** を用ひて**確定の**條件を示す。

假定のば

風が吹けば波が立たう。

確定の**ので**から

風が吹くので、波が立たう。

どもども

天氣がよければ、散歩しよう。

天氣がよいから、散歩する。

知らなければ、往つて問へ。

知らないから、往つて問ふ。問はう。

二、とも

どども

の用法

とも

は動詞及び動詞の様に活用

する助動詞の終止形、形容詞及び形容詞の様に活用する助動詞の未然形に添うて假定の意を示し、どどもは動詞・形容詞及び助動詞の已然形に添うて確定の意を示す。而して此等は何れもその條件の下に起る事實の順當ならぬ意をあらはす。

假定のとも

確定のどども

乞ふとも、與へじ。

乞へども、與へず。

笑はるとも、忍ばむ。

笑はるれども、忍ぶ。

悲しくとも、泣くな。

悲しけれども、泣かず。

見たくとも、見るまじ。

見たけれども、見ず。

◎とも を動詞・助動詞の連體形に添へて「悔ゆるとも、詮なからん。」「問はるゝとも、笑ふまじ。」のやうにいふことがある。中古文の法則ではないが、今は許容されてゐる。

◎とも を形容詞の終止形に添へて、「悲しとも、泣くな。」「暑しとも、裸にならじ。」など、條件の意味にいふのは誤である。

◎とも ども の二語のかはりに、も を動詞・助動詞の連體形に連ねて、「如何なる理由あるも、ありとも、返附せず。」「雨は降りたるも、た

れども風は吹かざりき。のやうにいふことがある。しかし誤解の生ずる恐のある場合には、用ひてはならぬ。例へば、
 代價は安きも我には不用なり。
 の「安きも」は、安けれどもと 安くとも との兩義に解し得られるから、これを避ける類である。

とも は、口語では連用形に添へて ても といふ。ども は、口語も文語も同じである。

乞うても與へまい。 乞ふけれども ども 與へない。
 乞うても與へまい。 乞ふけれども ども 與へまい。

笑はれても忍ぼう。 笑はれるけれども ども ころへる。
 笑はれても忍ぼう。 笑はれるけれども ども ころへよう。

悲しくて泣くな。 悲しいけれども ども 泣かぬ。
 悲しくて泣くな。 悲しいけれども ども 泣くまい。

見たくても見まい。 見たいけれども ども 見ない。
 見たくても見まい。 見たいけれども ども 見まい。

◎乞ふけれども「笑はれるけれども」など動詞助動詞の下に添ふ
 けれ は下の ども と合せて、 けれど けれども の一つ
 の助詞と見做しておく。

三、な、その用法 禁止のな は、ら行變格の動詞の連體

形、その他の動詞の終止形、受身使役の助動詞の終止形に添ふ。

長く權勢の地位に在るな。

すまじきことをすな。

人に疎んぜらるな。

生水を飲まずな。

御身はさる危険に近づかるな。

な

◎こゝに塵をすつるな。などいふのは、誤である。

有_る在_るな

泣_く 死_ぬ 來_く 爲_す 起_く 捨_つ 見_る 蹴_る 奪_はる 奪_はれる

見_し 奪_は 蹴_ら 奪_はる
し_む さ_す し_む す_す する
な

◎「塵をすつるなかれ。」よそみをするなかれ。などの なかれ は、前の なのやうに禁止の意を示すけれど、これは なくあれ の約まつたもので、禁止の な とは全く品詞がちがふ。

な は、口語ではすべての動詞及び受身・使役の助動詞の終止形に添ふ。

な_そ

泣_く 死_ぬ 來_る 爲_る 起_{きる} 捨_{てる} 奪_はれる 見_{させる} 奪_はれる 見_{させる} な

な_そ は、通例、その中間に動詞の連用形か變_さ變_は未_然形を挿む。亦一種の助詞と見做してよい。

な_泣き_そ。 な_笑ひ_そ。
吹_く風_をな_こそ_の關_{と思}へども……。
惡_口な_せそ。

との用法

四、と

の用法 そのおもなものは左の三種である。

な・そ の間に助動詞の添はつた動詞を挿むときにも、亦前の法則を通用する。

な泣か^しめ^そ。
な行か^せたま^ひそ。
な來^{させ}そ。

泣き 有^り 死^に 起^き 捨^て 見^見 蹴^蹴
な
そ

來^來 爲^爲
な
そ

並列のと

(イ) 並列のと

並列の と は、知と徳とを養ふの様に、名詞に添ふ助詞であるけれども、又、動詞・助動詞・形容詞の連體形に添ふことがある。これは、その連體形の下にあるべき名詞を略したのである。

見ると聞くとは、大ちがひなり。
人に知らるゝと知られざるとは、固より問ふところにあらず。

彼は學識の博きと徳望の高きを以て推さる。

指定のと

(ロ) 指定のと

指定の と も、亦、博く愛するを仁といふの様に、名詞に添ふ助詞であるけれども、又、動詞・助動詞・形容詞に添ふことがある。但しこの場合には、終止形でも、連體形でも、已然形でも、命令形でも、すべて文句の切れるところに添ふ。これは と

から上の句を一體言と見做したのである。

終止形に

添ふ例

善に善報ありと古人もいへり。
花咲きぬと告げ越す。
物言へば唇寒しといふ語あり。

連體形に

添ふ例

人やあると問ふ。
花なむ咲きぬると告げ越す。
春や疾き花や遅さと聞きわかん。

已然形に

添ふ例

我が校の名を揚ぐるは君にこそあれとことほぐ。
花こそ咲きぬれと告げ越す。
祝ふ今日こそ樂しけれと生徒唱ふ。

命令形に添ふ例

急がばまはれといふ諺あり。

共同のと

(ハ)と共にのと

これも亦友と公園に散歩すのやうに名詞につく

かや 疑問のやか

のが本體であるけれど、動詞助動詞の連體形に添ふことがある。

夜の明くると共に、宿を出づ。

日の暮れぬると共に、旅舎に着きぬ。

五、や

か

はその連體形に添うて、疑ひ又は問ふ意を示す。

有りや、無しや。

有りきや、無かりきや。

有るか、無きか。

ありしか、無かりしか。

◎ 中古文の法則は前述の通りであるけれども現今は往々、「有るや、無きや」、「有りしや、無かりしや」のやうに、やを連體形に添へても用ひる。

やかの係詞

や か は又動詞・助動詞・形容詞の前に置かれる事がある。この場合には、何れも下を動詞・助動詞・形容詞の連體形で結ぶ。

人^やある。

や

花^や咲きつる。

か

誰^かある。

春^や疾き、花^や遅き。

春と秋と何れかよき。

かやうに用ひた や か を稱して や か の係詞といふ。

◎例の事にや。「如何なる罪にか。」のやうに、や 又は か で言ひすてたやうに見える語は、下に來るべき連體形の語 あらむ など を省いたものである。

◎や か は共に疑問の助詞であるが 誰 何 いづれ のやうな疑の語が上にあるときは、や を用ひないで か を用ひるのが 中古文の法則である。

汝は何事を思ふか。

今日は幾日なるか。

春と秋といづれかよき。

但し現今は、「何事を思ふや。」今日は幾日なりや。」のやうに、や を用ひるものがある。

口語では、疑問を示すに か を用ひて、 や を用ひない。且、必ずこれを文の終に添へる。

有るか、無いか。

君の讀んでゐる本は何ですか。

春と秋とどちらがよろしいか。

や か は又疑問の意から轉じて反語となる。

豈悲しむに足らんや。

誰か其の志に感ぜざらん。

や か に感動詞の は を加へた や は か は も亦反語

反語のやか

やは
かは

ぞ なる
こそ

となる。

底ひなき淵やはさわぐ。

いかで悲しみ歎くべきかは。

六、ぞ なる こそ の用法 ぞ なる は上の語を指示する助詞で、こそ は多くの中からその一つを抜き出して強くいふ助詞である。

ぞ なる が文の上にあるときは、前章の や か の場合と同じ様に、下を動詞助動詞形容詞の連體形で結び、こそ が文の上にあるときは、下を動詞助動詞形容詞の已然形で結ぶ。

家 ぞ 榮ゆる。 家こそ榮ゆれ。

夜 ぞ 明けぬる。 夜こそ明けぬれ。

色 ぞ 濃き。 色こそ濃けれ。

ぞ なる
係詞
こそ 係詞

かやうに用ひた ぞ なる を ぞ なる の係詞といひ、
こそ を こそ 係詞 といふ。

◎名を天下に揚げたりとぞ。終に善人となりたりとなむ。誠に感ずべきことにこそ。のやうに、ぞ なる こそ で言ひすてたやうに見える語は、下に來るべき連體形の語 いふ 聞く 又は已然形の語 あれ ありけれ などを省いたものである。

◎心知りの友どちなむ別れ難く思ひて、しきりに訪ひ來。われこそ見送りに行くべかりしを、つひにえ果さざりけり。などのやうに、結となるべき用言を言ひ切らないで下に連接させることがある。かやうな場合には、係に對する結は自然に隠れてしまふ。

◎係に對して結ぶべき語は意味の上で自からさまつてゐるから、他の處で誤り結んでならぬ。次の文などは、何れもその結び方を誤つ

てゐる。

この時こそと思ひたれ。

菊の花は今ぞ盛と告げこしける。

第二十章 誤り易い品詞の識別

な_レの識別

一、な

(イ) 雨霽_レな_レば、郊外に散歩せむ。

完了の助動詞 _レの未然形。動詞・助動詞の連用形から受ける。

(ロ) この堤の上に登_レるな_レ。

禁止の _レ。動詞・助動詞の終止形から受ける。

(ハ) 花の色はうつりにけ_レりな_レ。

感動詞の _レ。動詞・助動詞・形容詞の終止形から受ける。

な_ムの識別

二、なむ

(イ) 散_レりな_ム後ぞこひしかるべき。

完了助動詞 _レの未然形 _ナに未来の助動詞 _ムの連體形 _レを續けたもの。動詞の連用形から受ける。

(ロ) 花の散_レるな_ム惜しき。

物事を指示する助詞の _ナ。動詞・助動詞・形容詞の連體形・體言・助詞等から受け、下を動詞・助動詞・形容詞の連體形で結ぶ。係詞。

(ハ) 稻葉の上はよきて吹_レかな_ム。

感動詞の _ナ。動詞・助動詞の未然形から受け、希望の意を示す。

三、に

(イ) またこそ参り候はめとて歸_レりにけ_レり。

完了の助動詞 _レの連用形なる _ニ。動詞・助動詞の連用形から受ける。

に_レの識別

しの識別

四、し

- (ロ) うれしきにも、かなしきにも思ひ出づ。
時・處を示す助詞の し。動詞・助動詞・形容詞の連體形、又は體言から受ける。
- (ハ) 夜の明けたるに、何とて起き出でざる。
反對を示す助詞の し。動詞・助動詞・形容詞の連體形から受ける。
- ニ) 風吹きに吹く。
動詞の意味を強める助詞の し。同一動詞の間にはさまりその連用形を受ける。
- (イ) 探[○]索[○]せし^しが、見當らざりき。
來[○]し^し方[○]往[○]く末のことも思ひやる。
烈[○]しと聞[○]きし嵐の音も、夜半の夢となりぬ。
過去の助動詞 き。の連體形なる し。さ行變格の未然形、か行變

ばやの識別

五、ばや

- (ロ) 頃[○]しも彌生半ばの空なりき。
さる事なきにしもあらず。
強めの助詞の し。種々の語から受ける。
格の未然・連用兩形、及びその他の動詞の連用形から受ける。
- (イ) 紅葉すれ^ばや照りまさるらむ。
確定の助詞 ば。に疑問の助詞 や。を添へた ばや。動詞・助動詞の已然形から受ける。
- (ロ) 心あてに折ら^ばや折らむ。
假定の助詞 ば。に疑問の助詞 や。を添へた ばや。動詞・助動詞の未然形から受ける。
- (ハ) 時鳥まだしきほどの聲を聞か^ばや。
希望の感動詞の ばや。動詞・助動詞の未然形から受ける。

はがをもち
やかの識別

六はがをもちやか (イ)は助詞。(ロ)は感動詞。

は (ロ) (イ)
花は櫻木、人は武士。(指示)
それ見よ、まことにておはしたるは。(詠歎)

が (ロ) (イ)
わが日の本。(所有)
鳥が鳴く東の國。(事主)
心のかぎりつとめけるが、遂に失敗に終りぬ。(反對)
そことも知らぬ旅寝してしが。(希望)

◎感動詞の が は がな と同じやうに、希望の意を示す。

を (ロ) (イ)
身を立て、道を行ふ。(目的)
山に登り、谷を渡る。(場所)
雨の降れるを、傘さして出で行きぬ。(反對)
八重垣つくるその八重垣を。(詠歎)
ぬれてを行かむ、小夜はふくとも。(詠歎)

も (ロ) (イ)
學も博く、徳も高し。(一致)
風はいかに強きも、農作を害するに至らじ。(不順當)
昨日彼を訪ひたるも、不在なりき。(不順當)
あはれ悲しも。(詠歎)
必ずしも然らず。(詠歎)

や (ロ) (イ)
わが思ふ人はありや、なしや。(疑問)
松島や、あゝ松島や、松島や。(詠歎)
霞か雲かはた雪か。(疑問)

か (ロ) (イ)
くるしくも降りくる雨か。(詠歎)

◎感動詞の か は、かな と同じやうに詠歎をあらはす。

第二十一章 文の成分

一、主語

文の題目となる語、即ち説明される語。

文の成分
主語

述語

二、述語

主語なる事物について述べる語。

鳥主 鳴く述。

花主 散る述。

これは主 よし述。

かれは主 あし述。

◎主語は多くは名詞・代名詞を用ひ、述語は重に動詞・形容詞を用ひる。但し名詞・代名詞に助詞を添へ、動詞・形容詞に助動詞・助詞を添へることのあるのは勿論である。

春雨主 降りやまず述。

夏は主 來にけり述。

それこそ主 よからめ述。

◎助詞 か、ぞ、で終るものは、助動詞 なる、を省略したものと見てよ。

今日は何日主なる客か。 汝は誰主なる客ぞ。

客語

三、客語

他動詞を述語としてゐる文において、その目的を示す

語。

農夫主 稻を客 刈る述。

余は主 山を客 愛す述。

◎客語は名詞又は代名詞より成り、通例 を、といふ動詞を伴ふ。但し、まゝ、を、の省かれたものもある。

水は飲まず、茶のみ飲む。

補語

四、補語

主語・述語・客語以外に於て、文意を全うする上に必要な

秀吉主 關白と補 なる述。

子が主 親に補 似る述。

艱難主 汝を客 玉に補 す述。

落武者主 芒を客 敵と補 おもふ述。

◎補語は名詞代名詞から成り前例の に と の外になほ の を をして より 等の助詞のつくこともある。

光陰は矢のごとし。

壯烈鬼神を泣かしむ。

隊長部下をして殘敵を討伐せしむ。

優等生學校より賞品を受く。

◎形容詞を述語とした文にも亦補語を要するものがある。

甲は乙に等し。 心は白絲と同じ。

◎指定の助動詞 なり たり 及び助詞 ぞ か などの述語とな

つた文は上に名詞代名詞を加へねばならぬ。この加へられた名詞・代名詞は何れも補語である。

秀吉は英雄なり。 汝は汝たり。

今日は何日(なる)か。 汝は誰(なる)ぞ。

修飾語

五、修飾語

主語述語客語補語の意味をくはしくするに用ひら

れる語。

白き鳥飛ぶ。 (主語鳥を修飾する。)

雨甚だ強し。 (述語強しを修飾する。)

春風櫻の花を散らす。 (客語花をを修飾する。)

父財産を幼き子に譲る。 (補語子にを修飾する。)

◎主語客語補語の修飾語は形容詞・動詞の連體形か、動詞名詞に添うた助動詞の連體形か、又は助詞 の が を伴つた名詞代名詞などである。述語の修飾語は主として副詞である。なほ次の例を見よ。

わが軍優勢なる敵を敗る。

母泣く兒に乳を飲ます。

鳥枯れたる枝に止れり。

第二十二章 文の成分の排列と省略

文の常の位置

一、常の位置

鳥^主 鳴く^述。
 農夫^主 稲^客を刈^述る。
 秀吉^主 關白^補と^述なる。
 校長^主 賞品^客を優等生^補に與^述ふ。
 校長^主 優等生^補に賞品^客を與^述ふ。
 雨^主 甚だ^{述の修}強^述し。
 父^主 數萬^{客の修}の財産^客を^{補の修}その子^補に讓^述る。
 我が^{主の修}軍^主 大い^{述の修}に敵兵^客を破^述る。

一、主語は上。

二、述語は下。

三、客語補語はその中に。但し補語は客語の上又は下。

文の成分の倒置

二、成分の倒置

四、修飾語は修飾される語の上。但し述語の修飾語は主語のすぐ下。

咲^述け花^主よ。(主語と述語との倒置)
 大なる^述かな、孝^主の徳。(同上)
 巧言令色^客の徒^主を誰^主かは惡^述まざらん。(客語を首位におく)
 そんな^客事をあなた^主は誰^補にお聞^述きでした。(口)(同上)
 雲のいづこ^補に月^主やど^述らん。(補語を首位におく)
 親の命令^補には子^主たるものは從^述はねばなりませぬ。(口)(同上)
 祝^述へ我が君^客を。(客語と述語との倒置)
 訪^述へかし人^主の花^客の盛り^客を。(同上)

◎成分の倒置は、語調を整へ、語勢を強めるなどの必要から、わざと行ふ

文の成分の省略

ものである。

◎詩歌には成分の倒置されてゐるものが多い。

三、成分の省略

(余は)明日君を訪はん。(主語の省略)

(世人)陰曆三月を彌生といふ。(同上)

◎命令禁止の文には主語の省略されたものが甚だ多い。

(汝等)前へ進め。

(人々)こゝに馬を繋ぐべからず。

その理由はいかに(あらむ)。(述語の省略)

千里の道も一步より(始まる)。(同上)

余は少しも(それを)知らざりき。(客語の省略)

余は昨日彼を訪ひしが、今も亦(彼を)訪へり。(同上)

校長、優等生に褒状を與へ、併せて(これに)賞品を授く。

(補語の省略)

山田君も、もう選手を(他の)人に譲つた。(口)(同上)

◎成分の省略は、思想の明瞭と確實とを缺かない範圍に於て、文を簡潔にし、語勢を強くするために行ふものである。

第二十三章 節

「花散る。」「蝶舞ふ。」「滿は損を招く。」などは、いづれも主語・客語・述語等から成る完全な文である。けれども、

花の散るは、蝶の舞ふに似たり。

滿は損を招き、謙は益を受く。

のやうに用ひられると、大きな文の一部分となつて、その獨立を失

節

名詞節

形容節

副詞節

ふ。かやうに、文がその獨立を失つて、他の文の一部分となつたものを節といふ。

一、名詞節

名詞の用をなす節。

花の散るは、蝶の舞ふに似たり。

君子は、人の己を知らざるを憂へず。

二、形容節

他の名詞を修飾する用をなす節。

月の明かなる夜は少し。

都大路は、八重葎しげれる野邊となりぬ。

誰か徳高き人を仰ぎ慕はざらん。

三、副詞節

述語を修飾する用をなす節。

雪降れば、木毎に花ぞ咲きにける。

彼は徳高けれど、學識に乏し。

述語節

小主語

總主語

對立節

單文

四、述語節

述語の用をなす節。

日本人は、忠義の心が深い。(口)

瀬戸内海は、波靜かなり。

◎かやうな場合には、述語中の主語 忠 の心が 波 を小主語といふ。

ひ、日本人は 瀬戸内海は を總主語といふ。

五、對立節

相對立して、全く同等の價值を有する節。

鳥歌ひ、蝶舞ふ。

雲は龍に従ひ、風は虎に従ふ。

月落ち、鳥啼きて、霜天に滿つ。

第二十四章 文の構造上の分類

一、單文

節を含まぬ文。

日暮る。
主 述

秋風衣を撲つ。
主 客 述

鳥籠の中に在り。
主 補 述

父財産を子に譲る。
主 客 補 述

わが海軍、大いに露國の艦隊を日本海に破る。
主の修 主 述の修 客の修 客 補 述

◎主語客語補語述語又は修飾語が二つ以上ある文でも、節を含まない限りは皆單文である。

屋根も庇も、手水鉢も、處として落葉ならざるはなし。
主 主 客 客

菅公は才と學と徳とを兼ね備へたり。
客 客 補 補

私は幼い時、父にも母にも兄弟にも死に別れました。(口)
述 述 補 補

家新しくして廣し。
述 述

我が日本人は清く、直く、明き心を持てり。
修 修 修

複文

二、複文

名詞節 形容節 副詞節 名詞節 形容節 副詞節
名詞節形容節副詞節を含んでゐる文。

花の散るは、蝶の舞ふに似たり。
名詞節 形容節

誰か徳高き人を仰ぎ慕はざらん。
形容節 副詞節

雪降れば、木毎に花ぞ咲きにける。
副詞節

重文

三、重文

二つ以上の對立節から成る文。

君は遠く去り、僕は永く留まる。
對立節 對立節

月明かに、星稀に、鳥鵲南に飛ぶ。
對立節 對立節 對立節

文は以上の三種に外ならぬけれど、時としては、以上の三種が相混

合して、頗る複雑になつたものがある。

慾深き人は、その心常に貧しく、
(複文) 對立節

慾なき人は、その心常に富めり。
(重文) 對立節 (複文二つから成る重文)

山は裂け海はあせなん世なりとも、
(重文) 對立節

君に二心われあらめやも。
(複文) 對立節 (重文を含む複文)

土裂けて、水湧き上り、
(單文) 對立節

巖われて、谷にまろび入り、
(單文) 對立節

渚こぐ舟は、波に漂ひ、
(單文) 對立節

道行く駒は、足の立ちどをまどはせり。
(複文一つと單文三つから成る重文)

第二十五章 文の性質上の分類

敘述文

一、**敘述文** 事實を有りのまゝに敘述する文。

時は金なり。(肯定)

風吹けば、海荒る。(同上)

月は發光體にあらず。(否定)

春は來れども、花咲かず。(同上)

風吹かば、海上荒れん。(推量)

明日は、風雨の虞あるまじ。(推量否定)

疑問文

二、**疑問文** 自ら疑ひ、又は人に問ふ意をあらはす文。

我が思ふ人はありや、なしや。

榮枯は夢か、幻か。

かしこに立てる人は誰ぞ。

夜や深き道や迷へる。

桃と櫻といづれか美しき。

◎疑問文には多く「や」「か」「又は」「ぞ」を添へる。但し、上に「何處」「何れ」など疑の語があるときは、「や」「か」を省いてもよい。

雲の何處に月宿るらん。

何れを花とわきて折らまし。

◎反語の文は形は疑問で、その意は断定である。今は暫くその形の上からこれを疑問文の中に加へる。

豈それ然らんや。

いかでさることのあるべき。

また來ん春のなからんやは。

ふたゝびとだに來べき春かは。

いかなぞ之を知らん。

命令文

三、命令文

要求を言ひ表す文。これに「かくせよ。」と正面から命令するものと、「しかするなかれ。」と反面から命令(即ち禁止)するものとある。

朝は早く起きよ。(命令)

よく學び、よく遊ぶべし。(同上)

光陰を徒費することなかれ。(禁止)

堤上の樹木を折るべからず。(同上)

四、感歎文

強い感動をあらはすもの。

あはれ、ことしも暮れぬるかな。

嗚呼、天道の無情一に何ぞこゝに至るや。

やあ、よくやつて來てくれたな。(口)

◎感歎文は通例 あ、あな、あはれ、おや、やあ、かな、やよ

な などの感動詞を含む。

◎感動詞の中、いざいでのやうに、單に發語の意を示すもの若しくは、かしのやうに、單に念を推し意を強めるに用ひるものなどを含んでゐるだけの文は、普通の敘述文又は命令文で、感歎文ではな

文はかやうにその性質の上から四種に分類するけれど、實際は一篇の文章の中に二種以上の文を包含する場合が多い。

面白感の眺感かな。 歌も及ばじ、晝敘も及ばじと、友と共に舷を拍つ

て賞歎敘しぬ。

あなあさまし感。 人もこそ聞敘け。 いかにか上臈たち、夜も更け

ぬるに、さやうにはおはするぞ。 とくく入命らせたまへ。

練習問題

第一章

次の文について、名詞・形容詞・動詞・副詞及び感動詞を擇び出せ。

- 1 父母の恩は山よりも高く、海よりも深し。
- 2 朝には星を戴きて出で行き、夕には月を踏みて歸り來。
- 3 土民はおもに農或は商を業とし、兼ねて漁獵に従ふ。
- 4 目がさめると、天井があかるく見える。その松の木に五六羽雀が來て騒いでゐる。
- 5 あゝ、このけだかい貴い富士の高嶺こそ實に我が大日本帝國の姿である。

第二章

次の文から名詞を擇び出せ。なほ固有名詞・數詞等があつたら、それをも示せ。

- 1 私は家のはいり口の二本の棕櫚の根方に、紅い一輪のアネモネの花をも見つけた。
- 2 十で神童、十五で才子、二十過ぎては唯の人。
- 3 太田道灌は初め左衛門大夫持資といひ、上杉定正の家臣なり。幼時より氣力盛にして人に屈せず、武道を好み、未恐しき少年よとうはさせられぬ。
- 4 良寛の好きなものは、一に子供、二に手毬、三におはじき。

第三章

次の文から代名詞を擇び出し、且、その種類並に稱を示せ。

- 1 あそこにある本はあなたの本でございませうか。いゝえ、あの本は私の本ではございません。あれは、多分太郎さんの本でございませう。
- 2 この天地を我が物顔に啼きさへづつてゐるのは小鳥だ。何といふい聲の小鳥があるものであらう。名の分らぬのが残念だ。その杉の梢で一羽啼いてゐる。彼方の杉の梢で他の一羽が答へてゐる。又遙か向ふの谷深く他の一羽が應じてゐる。よく耳をすますとなほ二三羽の聲がどこかで聞えるやうだ。
- 3 「汝は誰ぞ。そを何處にか負ひてゆく。」聞召せ背負ひ奉るは奴わが主と頼む乃木將軍の愛兒なり。」
- 4 明治天皇は、われら國民に勅語を下し賜ひて、朕爾臣民ト俱ニ拳拳服膺シテ威厥徳ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ。」とのたまへり。

第四章

次の文から動詞を擇び出し、且、その活用を示せ。

- 1 大空にそびえて見ゆる高嶺にも登れば登る道はありけり。
- 2 月落ち、鳥啼きて霜天に滿つ。
- 3 かばねは朽ちて骨となり、又は折れて霜結ぶ。
- 4 治にゐて亂を忘れず。
- 5 うはさをすれば影がさす。
- 6 強者存して弱者滅び、強國榮えて弱國衰ふ。
- 7 能はざるにあらず、せざるなり。
- 8 見渡せば、眺むれば、見れば、須磨の秋。
- 9 今日來な、明日こよ。
- 10 その將を獲んには、その馬を射よ。
- 11 のぼらば瀧につくらん、岩きりとほしゆく水の流れの岸に小屋見え、あやふくかゝる水車。たゞかりそめの板葺にのせたる石も苔むしぬ。さゝぬ窓より見入るれば、守りたる人はまだ若し。

次の文の誤を正せ。

- 1 約束を違ふ時は、信用を失ふべし。
- 2 何事も自らして、他人に任すことなし。
- 3 足の疲るを覺えず。
- 4 人の言ひ傳ふ所、此の如し。
- 5 家門を過ぎれども、立寄らず。

第五章

次の文から動詞を擇び出し、且、その活用及び形を示せ。

ひつそりとした天橋立に人籟絶えて、唯どこからともなく、ざあ／＼といふ響がする。松風か。否、足下の松影は濃い墨で描かれたやうに少しも動かぬ。音響は與謝の海が天橋一里の白砂を舐める響に外ならぬのである。其の響にひかれて汀に出て見る。その處に二間ばかりの花崗石のベンチがある。腰をかける。月下にほの白く眠る與謝の海。その懷には壁のやうな月を抱き、寐息かとはかり、ざぶりとざぶりと白砂にこぼ

れる漣は、まるで眞珠をこぼすやう。

第六章

次の文から動詞を選び出して、その自他を分けよ。

- 1 人若うしては學ばんことを願ひ老いては教へんことを欲す。
- 2 おいと聲をかける。土間の隅に引寄せてある白の上にふくれて居た鶏が驚いて目をさます。くゝゝゝと騒ぎ出す。
- 3 花咲く春のあけぼのを、はやとく起きて見よかしと、鳴く鶯も心して、人の夢をぞさましける。

次の動詞に自他の誤があつたら、それを正せ。

- 1 試験を終らば、一先歸らん。
- 2 庭の趣は、年と共に加へたり。
- 3 何事をも爲さで、一日を過ぎけり。
- 4 不毛の地開けて、樹木を植う。

5 塵積つて、山をなす。

第七章

次の文の中にある動詞の音便を指摘し、且、その本の語を示せ。

- 1 正岡子規はすべてのものに健啖であるなかに、殊に果物を好んで食うた。中にも柿は、大の好物であつた。
- 2 おゝ、楽しいげに軽らかに、みんなでとび上つて、障害物を越えたり、輪を巻いて踊つたり、急に輪をほどいて走り出したり、狂ふやうに楽しく興奮して、先へくと笛を吹いて走つてゆく水の精よ。

次の文の中の動詞をなるたけ音便に改めよ。

- 1 みづから請ひて義勇兵となる。
- 2 勝ちて胃の緒をしめよ。
- 3 進みては忠を盡さんことを思ひ、退きては過を補はんことを思ふ。
- 4 朝には星を戴きて出で行き、夕には月を踏みて歸り來。

第八章

次の文に假名遣の誤があつたら、之を正せ。

- 1 負ふた子に教えられて淺瀬を渡る。
- 2 艱苦に堪えて年月を過し絶えて憂悶の色なし。
- 3 恥じて能く改め、覺えて忘れず。
- 4 饑え凍えようとも、武士の體面を傷つけまい。
- 5 我が言う事を用いずば、後に悔ふとも及ばじ。
- 6 砲臺を構え、大砲を据へつく。
- 7 夜ふけ、月冴へて、犬の吠ゆる聲、しきりに聞えけり。
- 8 名物の地曳歌はこれです。彼一句、此一句歌つては曳き、曳ゐては歌う。抑えて揚げて、屈んで、伸びて、右の片足をひよいと上げて、拍子も調子も面白く、網は段々上つて来る。もう網が見えて來ました。もう網の中はさつきから鱈や鯖の青光り、白光りがばた／＼ばた／＼ごつたかえ

してゐます。

第九章

次の文から形容詞を擇び出し、且、その活用及び形を示せ。

- 1 人は交る友により、よきにあしきにうつるなり。
- 2 はでなる娛樂こそ田舎住居に乏しけれ、衛生上その他の危険なきはその失を償うて餘あるべし。
- 3 初島わたり漕ぐ舟うたの寄る浪毎に聞ゆるもゆかしく魚見が崎のこなたより渚をつたうて、沙白く松青さあたり、濱千鳥のむれとぶもをか
- 4 櫻の花は空の青く水の清い日の本の風土に最もよく釣合つて、深山市中、どこにあつても皆よろしい。
- 5 嘗て赤い土の露出してゐる上に鋭く尖つた切石が幾つもならんで、烈しい日に光つてゐるのを見た處には、今すが／＼しい色の小砂利を敷

きつめた參道の白い線が森の中に長くつゞいてゐる。
次の文の誤を正せ。

- 1 任重ふして道遠し。
- 2 惜しひかな、中道にして歿せり。
- 3 人を笑ふて喜ぶはあしし。
- 4 貴賓の來臨を辱ふす。
- 5 ひもじむときにまづいものはない。
- 6 よふこそお出で下さいまして、有りがとう存じます。

第十章

次の文の中の「べし」の意味を説明せよ。

- 1 油盡くれば、火は消ゆべし。
- 2 風起らば、雨やむべし。
- 3 必ず參上仕るべし。

4 三尺の秋水、鐵をも斷つべし。
5 講堂に參集すべし。
次の傍線ある語の意義、用法を明かにせよ。

- 1 歩まば歩まれしを、人に勧められて、已むを得ず車に乗れり。
- 2 捨てられし兒の心の中まで思ひやられて、あはれなり。

次の文から助動詞を擇び出し、且、その活用を示せ。

- 1 父は父たらずとも、子は子たらざるべからず。
- 2 男のすなる日記といふものを、女もして見んとてするなり。
- 3 若し怠らずして日に學に進まば、何ぞ古人に及ばざるべき。
- 4 旅行したきは山々なれど、父のゆるし給はぬを如何にかせん。
- 5 人の子たらんものは、重盛のその父に對するが、ごとくあらまほしきものなり。

- 6 助けらるゝものならば、助けてやりたきものにこそ。
- 7 親には孝をつくすべし。主人は大切にすべきものなり。人のものは

取らぬものなり。無理非道は行ふべからず。

第十一章

次の文から助動詞を擇び出し、且、その種類と活用とを示せ。

- 1 雨がやんだから、散歩に出かけようと思つてゐた處だ。
- 2 雨は降るだらう。しかし、風は吹くまい。
- 3 言ひたいことは山々ございますけれども、口不調法ですから、これで御免を蒙りませう。
- 4 苟も國運の發展をはからうとするならば、國民が常に元氣をひきたて、倦まないやうに努めていかなければならぬ。
- 5 長男は農學校を卒業させて實業に就かせ、次男は海軍兵學校に入れて海軍士官にした。
- 6 スタートがわるければ、途中でいかに恢復しようとしても、容易に追つつかないだらうと思はれる。

- 7 燈火を中心とした此の病牀六尺の天地は、今は何物にも煩はされることのない、極めて自由な、希望に充ちた世界の様に思はれた。
- 8 明治天皇の御製を拜すれば、王者の御風格が、大御心を通して、蒼穹に懸る日輪の如く、一天四海に輝きわたらせられる。歌柄といふ點からいへば、あらゆる古今の名歌人も、大帝の御前に鞠躬如たらねばならぬ。

第十二章

次の文から助動詞を擇び出し、且、その種類及び形を示せ。

- 1 知らぬことは、知らずと答ふべし。
- 2 櫻咲きなば、つれだちて向島に遊ばんと、友にいひやりけり。
- 3 秋のはじめになりぬれば、ことしもなかは過ぎにけり。
- 4 あづさ弓春になりなば、草の庵をとく訪ひてまし、逢ひたきものを。
- 5 今日、平和克復の日なり。ヴェルサイユ宮附近の混雜は名狀すべからざるものありしが、大道は箒目正しく掃き清められて、一切の通行を

- 禁じたれば、一點の塵をも止めざりき。
- 6 何といふ清い水だらう。月明りにも水底の砂が分明に數へられる。此處は橋立明神の森か。若しくは銀河を今渡つてゐるのではあるまいか。
- 7 選手は皆さうだらうと思はれるが特に君の態度はまた僕を喜ばせる。それは投げたと思ふ刹那、おれは今何をしたかといふことも忘れたやうな顔をしてゐる事だ。
- 8 私は二百五十萬市民を代表して、畏くも殿下に咫尺して此の有難い思召を拜し、實に感激恐懼に堪へなかつた。更に又殿下のかくも御立派な御態度を眼前に拜し奉つては、實に何とも言はれぬ心丈夫な嬉しい、勿體ない氣分が胸に燃える心地がして、唯譯もなく感涙が催されるのであつた。

第十三章

次の文から副詞を選び出し、且その限定してゐる語を示せ。

- 1 日やがて暮れなんとするに、風益、涼しく、氣愈、清し。
- 2 ほととくと折々たくく水雞の聲、いとあはれに聞ゆ。
- 3 明日ぜひお目にかゝりたい事がございますから、御迷惑ながら、どうぞ御在宅下さいますやう、くれぐれもお願ひ申します。
- 4 たま／＼一方を突き破つて山頂に達したかと思へば、忽ち他の砲臺から十字火を溶せかけますので、迎もたもちされません。
- 5 もう網の中は、さつきから鱈や鯖の青光り、白光りがばた／＼はねてゐます。
- 6 窓の下の山吹にも、ちら／＼と枝の深い方で黄色く綻びる花も見え出した。南天の實も、いよ／＼紅く濕つて見え出した。つい前の隣の小藪には、實に新鮮な蒲公英が數かぎりなく、朝毎に咲いては、また寺の子たちに摘まれてしまつた。

第十四章

次の文に含まれてゐる助詞を示せ。

- 1 君が代は千代に八千代にさゞれ石のいはほとなりてこけのむすまで。
- 2 急がずばぬれざらましを、旅人のあとよりはるゝ野路の村雨。
- 3 梨は涼しく潔し。南窓に風を入れて、柱に倚り襟をひらき、片手にて團扇を持ちながら一片を口にしたる、氷にもまさりてすが／＼しうこそ。
- 4 人の一生は重き荷を負ひて遠き路をゆくがごとし。急ぐべからず。不自由を常と思へば不足なし。心に望おこらば困窮したる時を思ひおこすべし。堪忍は無事長久の基、怒は敵と思へ。勝つことばかりを知つて負くることを知らざれば、害その身にいたる。おのれを責めて人を責むるな。及ばざるは過ぎたるよりまされり。
- 5 一天萬乗の大君におはしましながら、禿びた御筆をお用ひになり、破れた敷皮をお下げにならぬといふのは、いかなる思召でございませうか。

皆これ節すべきことを節して有用の事にのみ御用ひ遊ばすといふ大御心に外ならぬ事と存じます。

第十五章

次の文から轉來語を擇び出して、それを説明せよ。

- 1 始あらざることなし、よく終あること鮮し。
- 2 たとひ空腹を感じようとも、一時に餘り大食せぬがよい
- 3 赤・白・青の三艇は、互にまけじ劣らじと祕術を盡して進みしが、此の日の名譽は早く青艇の上に輝けり。
- 4 堤の上はよく掃除が届いて、塵一筋も落ちてゐない。
- 5 木立の篩へる月のあかりに、残りの雪の色冴えて、森の下道はるかなる霞に落つる影もなし。
- 6 いや／＼さうでない。鏡忍を見殺しにした上に、お前らまでどうして見捨てる事が出来よう。はじめから法華經の爲に獻つた此の命を正

に法華經の爲に失ふといふ、これほどの悦がまたとあらうか。最早手
向ひは決して無用ぢや。題目を高う唱へ唱へして命を終へよう。

第十六章

次の文の中の疊語・熟語・接頭語・接尾語を示せ。

- 1 目に青葉、山ほととぎす、初鰹。
- 2 追々夜寒になるゆゑ、皆々薄着を戒むべし。
- 3 犬どもあまた集りて、一匹の白兔を高みに追ひ上げたり。
- 4 手前には、折悪しく、持合せがございません。
- 5 去るものは日々に遠ざかり、来るものは刻々に近づく。
- 6 氣候も大きに春めきたれば、近日友だちと共にかれを音なはんとす。
- 7 よろしい、とにかく明日の總攻撃見合はせの一事だけは、拙者一命にか
けて御引受申します。
- 8 燈火の光晴れたる夜の星にまがひていと涼しげなるに、たなびく雲の

絶間より夕日の影花やかに匂ひ出でたる、いとをかし。

第十七章

次の文の○○の處に適當な助動詞を挿入せよ。

- 1 下男に命じて、門を閉ぢ○○。
- 2 今日風が烈しいから、海が荒れ○○。
- 3 彼の演説は、來賓一同に傾聽せ○○たり。
- 4 出發の準備は已に整ひ○○。
- 5 知ら○○を知ら○とせよ。
- 6 ベートーベンは、はいつてみ○○、さうして一曲ひいてやら○。といつ
た。

次の文の中に、中古文の法則には合はないが今日は許容されると
ころや、誤つたところがあつたら、之を説明せよ。

- 1 請ふ、我をして一言するを得せしめよ。

- 2 書生に門前の掃除をさす。
- 3 義經、那須與一をして扇を射せしむ。
- 4 通券所持の人々は、東の入口より入場さるべし。
- 5 余は嘗て彼に辛き目を見せられたり。

次の文の○○の處に適當な動詞の語尾を挿入せよ。

- 1 時機の到るを待○ぬ。
- 2 昨朝神戸を出發○き。
- 3 いたづらに過○し月日こそ惜しけれ。
- 4 これ、我が最も愉快に感○し一事なり。
- 5 みづから犯○し罪は、免るべからず。

次の句の中に、許容される言葉づかひや、誤つた語があつたら、之を説明せよ。

費せし金。

講じし本。

着ならせし衣。

言ひ出せし折。 語りつくしし時。 父にておはせし人。

任せし事柄。 敵をまかせし刹那。

次の文に於ける助動詞の接續の誤を正せ。

- 1 此の品に手を觸るゝべからず。
- 2 此の處に塵芥を捨てべからず。
- 3 彼は、毎夜深更まで勉強するらし。
- 4 無用の事には、關係せまじきものなり。
- 5 不都合の事なきやう、こゝろえべし。
- 6 去りたきものは去るべく、來たきものは來るべし。
- 7 富士山巔の雪は、夏も絶えまじ。
- 8 明日は早立なれば、今宵は早く寝べし。
- 9 今日、雨も降るまい、風も吹かまい。
- 10 しつかり勉強せよう、そして立派に及第せなければならぬ。

次の文に助動詞の接續の誤があつたら、之を正せ。

- 1 敵艦、白旗を掲げり。
- 2 我が事、終れり。
- 3 目的は、已に遂げり。
- 4 刀を研げり。
- 5 年老いて、氣力大に衰へり。

第十八章

次の文に於ける動詞・助動詞の接續を説明せよ。

- 1 さしのぼる朝日のごとくさわやかにもたまほしきは心なりけり。
- 2 野分して縣の宿はあれにけり、月見に來よと誰にいはまし。
- 3 懈らずして日に學に進まば、何ぞ古人に及ばざるべき。
- 4 世の人は、明治の中興は五百年來の武門の政を破りたるなりと思ふらめど、心ある人は、溯りて天平以來の宿弊の更に破り難きを破られたることを知るならん。

第十九章

次の文に、中古文の法則に合はぬところ、又は誤つてゐるところがあつたら、それを改めよ。

- 1 明日雨天に候へば、延期致すべき筈に候。
- 2 たとひ明日雨降るも、彼は歸國すべし。
- 3 無事に暮し居り候はゞ、御安心下さるべく候。
- 4 萬一不行届の儀之あり候へども、御免下さるべく候。
- 5 刀折れ矢盡くるとも、いかで屈すべき。
- 6 いかにか陳謝するとも、赦されず。
- 7 都合あしとも、約束をば違へず。
- 8 風はなけれども、寒さは強からん。
- 9 明日天氣なれば、遠足せん。
- 10 善を爲せば、人に喜ばるべく、不善を爲せば、人に惡まるべし。

11 此方は忘れたるも、彼方はよく覚えて居たり。
 12 天は兩雄の並立を許さず、彼亡びざれば此興らず、彼衰へざれば此盛ならず。

次の文に誤があつたら、これを正せ。

- 1 そんないたづらはすな。
- 2 女々しい事をして人に笑はれな。
- 3 悪しき事は決してするな。
- 3 この溝の中に塵を捨つるな。
- 6 友が訪ふとも、な長居せ給ひそ。
- 7 萬事に油断なせそ。

次の文の 〓 の用法と接續とを説明せよ。

- 1 寝よとの鐘の音、枕にひびく。
- 2 これをこそ獨を慎むとはいふなれ。
- 3 取ると取らざるとは、汝にまかす。

- 4 時は金なりと古人もいへり。
 - 5 古語に曰く、妖は徳に勝たずと。
 - 6 歌を詠むと詩を作るといづれか難き。
 - 7 友人と上野公園に散歩せり。
 - 8 青年、國を出でて都へと志す。
 - 9 恐しとも思はず。
 - 10 今日來ずば明日は雪とどふりなまし、消えずはありとも花と見ましや。
- 次の文に中古文の法則に違つたところや、誤つたところがあつたら、それを指摘せよ。
- 1 この事は如何に處理して可なるべきや。
 - 2 この樹木の、この地に適するや否やは疑はし。
 - 3 富士山と新高山と、いづれが高しや。
 - 4 民をおもほす御心に、大御衣やぬがせたまひき。
 - 5 たとひ人には知られざるも、心に恥ぢざるべきや。

6 そこひなき淵やはさわげ、山川の淺き瀬にこそあだ波は立つ。
次の文の係結を説明せよ。

- 1 精神一到せば、何事か成らざらん。
- 2 夜やくらき道やまよへる、時鳥わが宿をしも過ぎがてに鳴く。
- 3 恐しく、鬼も子を生むにや。鬼の子は如何なるものにか。
- 4 かへらじとかねて思へば、梓弓なき數にいる名をぞととむる。
- 5 まことに行末たのもしき御事にこそ、いとせめて覺えしか。
- 6 兵の、こゝにこそといはんずる一言をなむ待たせたまひける。
- 7 あれ見給へ箱王殿。空に飛ぶ翼も別の翼ぞ交へぬ。五つあるは一つは父、一つは母、三つは子どもにぞあるらむ。物言はぬ鳥類だに斯くの如し。我等人倫に生れながら、わどのは弟、我は兄、母は實の母なれども、曾我殿は實の父にてましまさぬこそ悲しけれ。
- 8 國こそ多く、處こそ廣きに、當國へしも流されけるは、さるべき佐殿の父の骸にも見參したまふべき事にやと哀れにこそ候へ。

第二十一章

次の文を文の各成分に分解せよ。

- 1 余は明日君を訪はん。
- 2 冬の夜の月は、此の上なく寒し。
- 3 余は見すくよき機會を失へり。
- 4 活潑なる精神は、常に健全なる身體に宿る。
- 5 各級競争の勝利は、遂に四年級選手に歸せり。
- 6 日蓮上人は、各時代を通じて類稀なる豪傑なり。
- 7 明治二十三年十月三十日、明治天皇は、忝くも教育勅語を我等國民に下し賜ひたり。
- 8 太陽は私たちにソロミンの榮華を見せる。夜は私たちに唯微かなる螢の光と少年の笛の音とを恵む。

第二十二章

次の文の排列を常の順序に改め、且省略されてゐる語を補へ。

- 1 落書無用。
- 2 仰げば尊し、わが師の恩。
- 3 土足にて昇降すべからず。
- 4 やよ正行、忘れたるか、父の遺訓を。
- 5 降る雪にきこりの路もうもれけり。
- 6 たれかあはれと聞かざらん、あはれ血に泣くその聲を。
- 7 もうお歸りですか。どうぞ御機嫌よう。
- 8 おとうさんはどこへ。停車場へ。何しに。お見送りに。
- 9 「おや良寛様が」といふと、あわてゝ静かにしろ、静かにしろ。子供が見つける。
- 10 花さそふ比良の山風吹きにけり、こぎゆく船のあと見ゆるまで。

次の文に於て、差支のないかぎり成分を省略して、短歌に約めよ。
花をちらす風のやどりをばたれか知る。若しこれを知る人あらば、願はくはわれに教へよ。われ、そのやどりにゆきて、風にうらみむ。

第二十三章

次の文から節を擇び出し、且その種類を示せ。

- 1 天高く、氣清し。
- 2 水清ければ、大魚なし。
- 3 子曰く、剛毅木訥は仁に近しと。
- 4 仁者はいのちながし。
- 5 豹は死して皮を留め、人は死して名を留む。
- 6 雁は花咲く春を見すてゝ歸りぬ。
- 7 三人集れば文殊の智慧。
- 8 爲朝矢二つ三つ放さば、夜の明けざるうちに勝負は決すべし。

- 9 思想は財布と反対で、外へ出せば出すほど豊富になる。
- 10 竈に火は燃えて居る、菓子箱の上に錢は散らばつて居る、線香は吞氣に燻つて居る。

第二十四章

次の文の構造上の種類を分ち、且、文中に含まれてゐる節を分類せよ。

- 1 彼は柔道と野球とに長ぜり。
- 2 諺に、健全なる身體に健全なる精神宿ると云へり。
- 3 雨降つて地固る。
- 4 勅なれば髪はさりもし剃りもせん、清き心は神ぞ知るらん。
- 5 君の説はならば、僕の説は非ならん。
- 6 衣は肝に至り、袖は腕に至る。
- 7 氣霽れては、風新柳の髪を梳り、氷消えては、浪舊苔の鬚を洗ふ。

- 8 古の奈良の都の八重櫻、今日九重に匂ひぬるかな。
- 9 春が深くなると共に、麥が伸びる、桑が芽を吹く。
- 10 木の葉が落ち盡せば、數十里四方に互る林が一時に裸體になつて、蒼ざんだ冬の空が高く此の上に垂れ、武藏野一面が一種の沈靜に入る。

第二十五章

次の文をその性質の上から分類せよ。

- 1 人の一生は重き荷を負うて遠き道を行くが如し。急ぐべからず。
- 2 あつばれの馬や、名馬や、何者の馬ぞと褒めたまふこと大方ならず。
- 3 痛はしや、美しき都上臈の、今のうちに灰土とならせたまはん事の無慙さよ。
- 4 君が人生の毀譽を度外に置き、天下後世の議論を顧みざるもの故なきにあらず。嗚呼、君の心事誠に悲しからずや。然れども、事已にこゝに至る。之をいふも何の益かあらん。

5 あはれ、此の殿は大剛の人かな。去んぬる十日より多くの人出仕し給ひつれども右衛門督殿の座に着く人一人もおはしまさざりつるに、しいだしたる事よ。門を入り給ふより聊かも臆したる體も見え給はず、あはれ、この人を大將として合戦せば、いかばかりか頼もしからん。

6 さればこそ、當のヴェニス人はアドリヤ海をヴェニス市の夫と見たのである。都を妻とし海を夫とする、何と美しい想像ではないか。

7 美なるかな、此の佐渡が島の風情。凡そ眺めてかくも懐かしく、又譬へん方なく心動かさるゝ景色は、之を他に求めて、己は有りとも覺えぬ。

新編日本文典終

昭和二年十月二十七日
昭和三年三月二十五日
昭和三年三月二十五日
訂正再版印刷
訂正再版印刷
發行

編者 吉田彌平

東京市小石川區高田老松町五十二番地

編者 小山左文二

東京市神田區通神保町六番地

發行者兼印刷者 上原才一郎

東京市神田區通神保町六番地

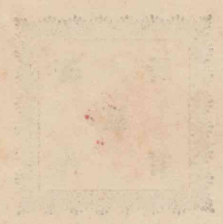
發行所 光風館書店

(電話) 神田三〇八七番
振替口座東京三二七番



本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候はゞ直に御送附可致候

Vertical text on the right side of the page, likely a title or introductory text.



Horizontal text located below the red seal impression.

Large vertical characters, possibly '米' (rice) and '山' (mountain).

Vertical text below the large characters, possibly '六' (six) and '一' (one).

Vertical text below the large characters, possibly '二' (two).

Vertical text below the large characters, possibly '吉' (auspicious).



Vertical text on the left side of the page, possibly a date or recipient information.



広島大学図書

2000089450

